

Mothers of Invention: Calendar Girl

発明の母: カレンダー・ガール

文: ジェニファー・ニュー (Jennifer New)

ニキ・マックルーアは、情熱だけが取柄の貧乏アーティストから、自分用の小さな森さえ所有する芸術家ママへ、と、極端な道の流れてきた。つまり、他の多くのアーティストと同じように、自信だけを抱いて清水の舞台から飛び下りたわけである。大学を出てすぐ、9~5時の仕事に就いてフリーランスへ。しかし、彼女は、ささやかな幸運と才能で、素敵な場所に辿り着いたのだ。

10 年ほど前、マックルーアはワシントン州オリンピアに住む二十数歳の若いアーティストに過ぎなかった。彼女は、自身をライオット・ガールと呼び、キッキング・ジャイアントというパンク・バンドのツアーのため、壊れたワーゲンのヴァンの中で手袋を縫っていた。それは 11 月のことだったが、翌 12 月に予定されていたあるライブで、彼女自身、何かやらなきゃいけないことになっていた。なにをしよう？ まさにそのとき、カレンダーを作るというアイデアがひらめいたのだった。彼女は最近、リノリウム版画やスクラッチボードをやめ、黒い紙に絵を写してカッターで切り抜くことをはじめていたのだった。そして、彼女はその方法でカレンダーでも作ってみようと思いついたのだ。

それが功を奏した。以来、彼女は毎年毎年、前の年よりも倍の数のカレンダーを刷るようになった。そのカレンダーには「次の 1,000 年で作り、行なうこと」とか「今こそ」といったように、見る者に考えを促すタイトルがつけてある。いまでは、そのカレンダーのおかげで、彼女と、彼女のパートナーである家具職人のジェイ T、息子のフィン、そして家族が暮らすオリンピアのささやかな家を支えるに十分な収入が入るようになった。こんなことになるとはヤンチャだった頃には思いもしなかっただろうが、きっと昔の自分だって今の自分を認めてくれるだろうと彼女は思っている。

「20 代のとき、ライオット・ガールだったことは、よく覚えているわ」と、マックルーアは柔らかい声で言う。「わたしより 10 歳も年上の女性たちの音楽を聴いて、わたしだってアーティストになれるかもしれない。それに、ちゃんとした車だって運転できるかもって思ったのよね」。

それからマックルーアはずっと、自身をアーティストとしての生活に捧げてきた。定収入には目もくれず、収入の足しにするため、音楽フェスティバルでブリトーをつくって売らなければならなかったって、それはそれ。しかし、実務的な面がからつきしダメだったわけではない。1980 年代終盤、エヴァーグリーン・ステイト大学で学ぶ生徒として、彼女は科学を専攻し、それがきっとよりよいキャリアに結びつくはずだと考えていたのだ。自身の興味に繋がるような授業を取り、そのうちのひとつには、

1週間に渡る沼バエ研究なんてのもあったらしい。そこで彼女は、昆虫の細密な素描を手がけ、自身の創作を含む準科学的なレポートを書き上げる。「まじめな昆虫学とメス蠅のあえぎ声の間を行ったり来たりする昆虫ポルノの上に、屈折した長老みたいなものを作ったってわけ」と、彼女は笑いながら説明してくれた。その間、往々にして「えっと、なにをを考えてたんだっけ？」とか「あれ、スゴくない？」に脱線しながら。

大学を卒業して、彼女はワシントン州のエコロジー課で働きはじめ、いくつかのプロジェクトにフリーランスの立場で関わるようになった。それでも彼女は、生活力のある、自立したアーティストになることを望んでいた。そのころだった。ひとりの友達が、彼女に切り絵に転向してはどうかとアドバイスしてくれたのだ。「はじめて紙を切ったときから、頭の中の全神経がしっくり繋がったのよね。すごい気持ちよかった」と、彼女は言う。

彼女の最初の切り絵作品はリンゴを扱った連作だったが、それらはキンコーズでコピーされ、リボンで束ねられて1冊の本へと仕上がった。「そのときに住んでいたアパートの下にあった小さなガーデン店に見せたら、なんと買ってくれる人がいたの！」。彼女は思い返す。そのときこそ、自身の環境への愛情とアートの才能がうまく合致したことを確信した瞬間だったのだろう。

もちろん、それは彼女の家計を助けることになった。ボロボロのワーゲンもあったし、アトリエの借り賃で月に100ドルを払わなければならない。30歳で、この世界に自分の場所をつくることで胸が一杯だった彼女は、小さな家を持てるくらい切り詰めて稼ぎ出し、文字どおり、そこに根を下ろしたのだった。つまり、彼女は30本以上の木を自分の土地に植えたのだ。続く数年が過ぎ、彼女は恋をする。それまで子どもを産むことなど夢にも思っていなかった彼女だが、突然、自分の体が母親になるために「叫び声を上げている」ことに気づいたのだった。

3年前、フィンを産んだ彼女は、今や、愛情の塊となった。息子の気まぐれな料理の才能に驚嘆し（本物の北西部人らしく、シャンテレル(杏茸)アイスクリームを作りたがったらしい)、絵本の楽しさに開眼し、環境への取り組みにも以前よりずっと熱心になった。失ってしまったものの多さ——作業に没頭する時間、深夜の時間帯、友達のアーティストとのパーティー——について気にならないこともないが、多くの母親アーティストが悩み、落ちこんできたジレンマを見つめる前向きな方法も見つけられたようだ。

フィンを産む前、彼女はロスアンゼルスでの展示用の作品制作をはじめていた。しかし、出産後、彼女が作業机に戻ったとき、以前は2週間で仕上げられたものが、いまでは2ヶ月かかることに彼女は愕然とした。そして、最初の落胆が静まると、彼女は新しい仕事の進め方を見つけなければならなかった。「子どもの世話をしているときにアイデアを練って、子どもが眠ったら早速作業に取りかかるの」と彼女は教えてくれる。以来、彼女は以前のやり方にいくつかの近道を設けるよう

になった。それは、自分の中の純粹主義者が嫌う方法でもあったに違いない。そのための罪悪感もあったらしいが、しかし、それよりも彼女は自分に言い聞かせた。「いまできる方法はそれしかないの」。

マックルーアは、自分の苦境を理解してくれる母親芸術家の友達がいなくなって寂しい思いをしている。友達の多くはオリンピアを去ってしまい、愛着のあった以前のスタジオも手放さざるをえなくなってしまったのだ。新しい借家人は若い男性アーティストで、彼はいつも大きな音で音楽を鳴らし、ペンキのガスを充満させていたため、彼女は、自分がカマトトぶったオバサンみたいな気持ちになってしまったという。しかし、自分より10歳年上のひとりの友達のキャリアを知ることによって、ようやく気を取り直せたようだ。「子どもが小さいときに、その友達が仕事を休業している様子を見ていたんだけど、昔の仕事やスタイルをのんびりやっているのよね」とマックルーア。「でもいまでは、彼女は修士号を取って復活したの」。そのことは、フィンが大きくなれば、彼女にだってまだいくらでも機会が残っていることを思い出させてくれたのである。

わたしたちが話しているとき、マックルーアは裏庭にジェイ T が建てた 60 平米のスタジオに引っ越している最中だった。そこでなら、自分が植えた木に囲まれてフィンと一緒にいることができるのだ。下書き用のテーブルは、ますます多岐にわたる仕事で埋め尽くされている。去年は、エイブラムス社が彼女の作品集『Collect Raindrops』を発行し、最近の彼女は、オリンピア市のマンホールの蓋をフィンの足と小さな鮭の姿をあしらってデザインしていた。また、彼女は、カルデコット賞受賞者であるシンシア・ライラントの詩集の挿絵も手がけていた。わたしが、そういった素晴らしい作品は一体どこから着想するのかと訊いても、彼女は、自分の作品のポートフォリオさえ持っていないというだけ。束の間考えて、彼女は微笑み、それから真面目に言うのだった。「そうね。あのカレンダーは本当に素敵なアイデアだったってことね」。

「Divine Caroline」より

<http://www.divinecaroline.com/article/22307/36447-mothers-invention--calendar-girl>